

# 博物館だより

NO.22

## 春季企画展 「妙興寺靈宝展」

平成9年4月26日(土)～5月25日(日)



絹本墨画滝見観音図

臨済宗妙心寺派の巨刹長島山妙興報恩禅寺は、南北朝時代に開創されました。戦国時代に一時衰退しましたが、豊臣家の尊崇を受けて妙心寺派に付くこととなり、中興し現在に至ります。寺宝は国・県・市指定文化財のみで70件近くに上ります。特に重要文化財は、一宮市内所在の半分以上を占め文化財の宝庫と言えます。

江戸時代末期成立の「尾張名所図会後編」に「妙興寺靈宝弘通(ぐつう)の略図」が登載され、御開帳の様子が描かれます。本展覧会はこれの再現を試みるとともに、昨年度まで4ヶ年間をかけて修復された重要文化財「絹本着色十六羅漢像」を一挙に公開しようとするものです。

## 民俗探訪(8)

ハンドガメと言えば「常滑焼」。交通機関が発達する以前、水ガメや肥ガメのような重い焼きものはどのようにして一宮に運ばれたのでしょうか？今回は、この謎について愛知県教育委員会文化財課の赤羽一郎さんにご寄稿いただきました。

### 木曾川の物資運搬

## ～常滑焼を運ぶ～

愛知県教育委員会文化財課

赤羽一郎

はじめに

昨年(2019)の3月、学芸員の久保さんと一宮市北方町宝江にお住まいの中村芳一さんを訪れた。木曾川を常滑焼を積んで運んだ最後の人がいるとの情報を掴んだ彼女に誘われてのことであった。一宮市街地から北西に延びる岐阜街道は、葉栗郡木曾川町を貫通し再び一宮市に戻り、木曾川橋を渡り岐阜県羽島郡笠松町に至る。この木曾川橋の南詰に中村さんが息子さんとともに営んでおられる水道資材卸店『瓶久』(かめきゅう)がある<写真1>。忙しく立ち働いている合間を縫って、私たちの取材に応じていただいた。



写真1 木曾川南詰の『瓶久商店』

### 『瓶久』さん

中村芳一さんは、大正4年4月15日(1915)生まれで、昭和3年(1928)に尋常小学校を卒業してから昭和16年(1941)に兵役に召集されるまでの間、船に乗り木曾川を行き来していたという。代々『瓶久』を名乗っていた中村さんの家は、家屋の基

礎や石垣に使われた石材を運搬・販売して生計をたてていた。木曾川中流域で採取された丸石やグリ石を船で積んで木曾川を下り、伊勢湾の内奥を横切って知多半島西岸に沿って南下し、寺本(現;知多市八幡)の石屋に納入していた。その後、石を下ろした空船をさらに南下させ、知多半島西海岸随一の港湾都市大野を経て焼き物の産地として著名な常滑に到達しく図1>、そこで土管や水甕を仕入れ、木曾川を遡って戻ってくるというものであった。宝江で陸揚げされた土管や水甕などは大八車にのせられ、一宮や岐阜方面に運ばれて販売されたという。この『瓶久』という屋号もこの常滑産の瓶(かめ)に因んだものであろう。この水甕、土管、さらには井戸筒といったいわゆる「水まわり」商品を扱っていたことが、今日の水道資材卸店という家業に結びついたともいえる。

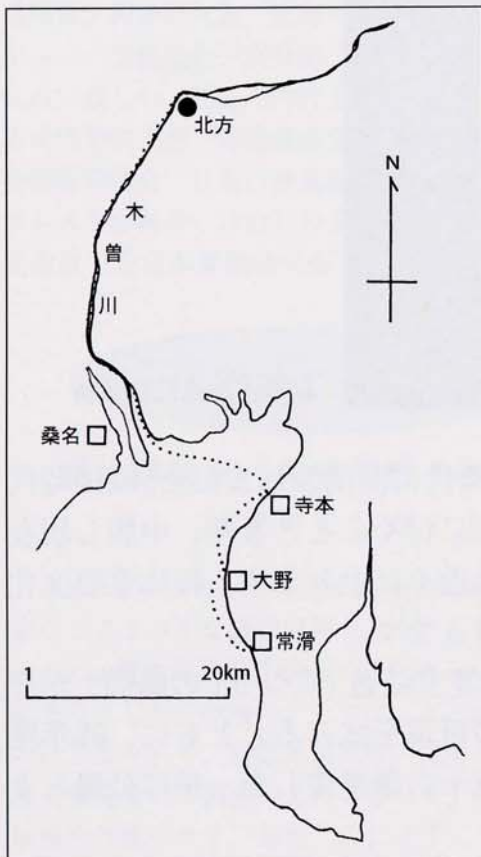


図1  
北方～  
常滑間  
航路

### 屈折点

ところで、木曾川中流域の石材と常滑の焼き物を巧みに取り扱い商品とした『瓶久』の所在位置に目を向けてみよう。愛知県にとっても一宮にとっても北西端にあたる一宮市北方町宝江付近は、自然地理学上も大きな特徴をもった箇所であり、同時にその特徴が人々の生業に大きな影響を与えている点で誠に興味深いものがある。この宝江と対岸の笠松を結ぶ木曾川橋の上流約800mに名古屋

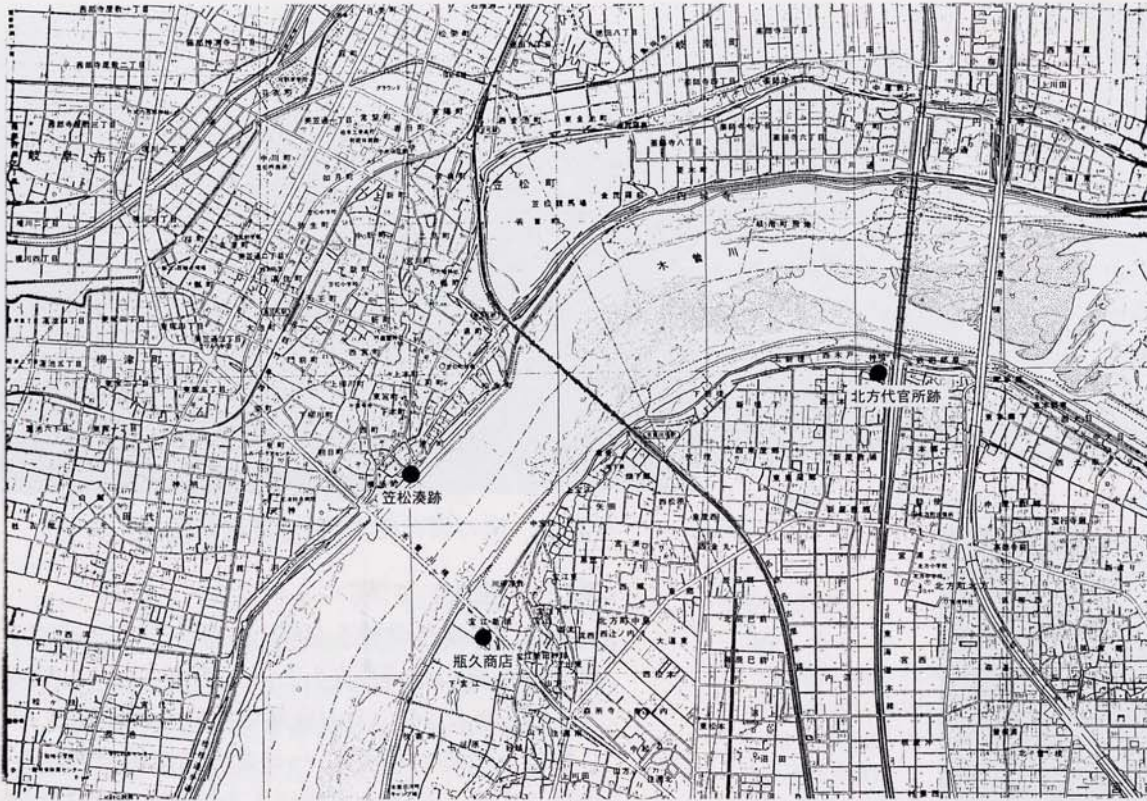


図2  
一宮市  
北方付近

鉄道本線の鉄橋が架かっている。この鉄橋付近で、犬山から濃尾平野に出て西に流れていた木曽川はその流れを南に変えている<図2>。同時に、木曽川はこの地点でその河床斜度が極端に緩やかになっている。つまり、水平方向のみならず垂直方向でも、この地点は木曽川の屈折点となっているのである。このことは視覚的にも確認することができる。名古屋鉄道本線の鉄橋をはさんで、広く白い河原のなかを水が滔々と流れている上流と岸に繁茂する葦などを水面に写してゆったりと流れる下流の対照的な姿がみてとれるであろう<写真2>。すなわち、この地点で犬山を扇のかなめとする扇状地を流れ下る「瀬の川」から高低差のほとんどない三角州をたゆとう「淵の川」に、木曽川は変身するのである。

### 物流基地

木曽川は、木材を流れにまかせて下らせる、いわばベルトコンベアの役割を担ってきた。木曽の山林がヒノキ・マキ等の一大産地として評価されてきたのも、木材の天然の搬出路であった木曽川があつてのことといえよう。これらの木曽川を流れ下ってきた木材は、錦織（現；岐阜県加茂郡八百津町）で筏に組まれ、さらに湊谷から平野での出口にあたる犬山や、一段と流れが緩やかとなる上記の北方で筏はさらに大きく長く編成されたのである。



写真2 木曽川橋から名鉄本線鉄橋を望む

一方、このような木材のバラバラな流下や筏の通行もあって、木曽川の船運は思いの外活発ではなかったとのことであるが、それでも船運の物流に果たした役割は決して小さくはなかった。この船運に使用された船舶も、河川の河床斜度・深さによって選択されていたのであり、北方以北の「瀬の川」では船体がスリムで船底の平らな「へーダカ」が、また北方以南の「淵の川」ではより大型の「オオブネ」が使われていたという。このような美濃の川船であった「へーダカ」や「オオブネ」も、家庭用の薪炭や『瓶久』のように石材を積んで伊勢湾に出ることも多く、常滑港

〈写真3〉を随分賑わせたとのことである。それはともかく、北方は、「ヘーダカ」から「オオブネ」に（あるいは「オオブネ」から「ヘーダカ」に）荷物が積み替えられた、現代で言うところの物流基地でもあった。因みに、この北方には、天明元年（1781）にそれまでの郡役所に代わって代官所（御陣屋）が設置されたが〈写真4〉、同時に川並奉行所がこの代官所に併設されている。この川並奉行は代官が兼務し、木曾木材の筏の管理、上下する船の荷物の検視を行っていた。尾張藩の気の使いようが知られる。

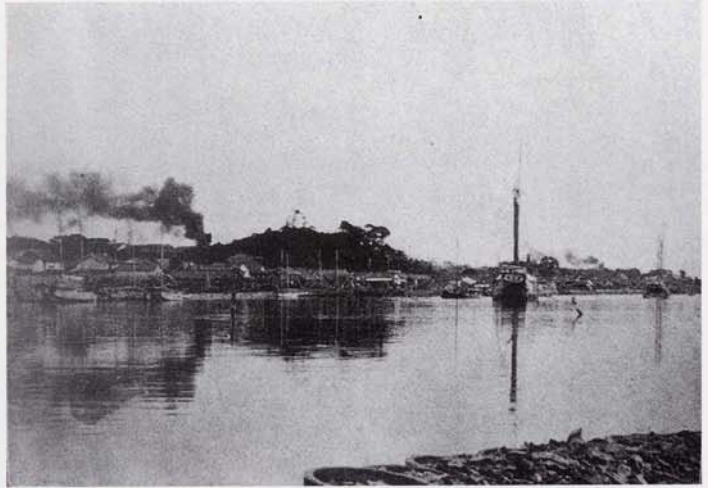


写真3 窯の煙と常滑港（『常滑陶器誌』より）



写真4  
北方代官所跡  
（上左は  
JR木曾川鉄橋）

### 再び『瓶久』さん

話を、尋常小学校を卒業してから応召まで石と焼き物を運んだ『瓶久』こと中村芳一さんに戻そう。上記のように、犬山地域で採取された丸石・グリ石は小型船で運ばれ、一旦北方に陸揚げされた。中村さんは、見習い同然に人夫に混じって立ち働いた。船をとりしきる船頭の多くは、大垣方面から来ていたとのことであるが、中村さんが船に乗り込む頃は、既に発動機付きの機械船であった。石材は知多半島寺本の石工の注文に応じて船積みされた。中村さんの記憶によると、船は月1回の割合で川を下り、往復約1週間の旅程であったという。



写真5 木曾川の大船 昭和30年代（写真提供：可児幸彦氏）

常滑で積み込んだ製品としては、台所の水カメに用いる甕、排水用の土管、井戸の枠に用いる井戸筒（井戸側）〈写真6〉があったという。それらの製品のうち、甕は㊸ 沢田四郎兵衛から、土管は㊹ 陶榮株式会社、食關 豊吉、㊺ 丸登合資会社から、また下水管は分から仕入れたとのことである。これらの常滑焼の製造販売業者は、瀧田貞一氏が著し明治45年1月（1912）に常滑町青年会によって発行された『常滑陶器誌』〈写真6〉の巻末広告欄に姿を見せている。いずれも明治・大正、昭和前期の常滑焼を支えた有力業者である。

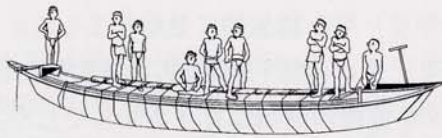


写真6 常滑港付近の製品置き場  
（『常滑陶器誌』より）



写真7 『常滑陶器誌』と巻末の広告欄

この『瓶久』こと中村芳一さんの素晴らしい記憶力を頼りに、上記の常滑焼の製造販売業者側に遺されているであろう史料類を調査することによって、木曾川を遡った常滑焼をめぐる需給関係の一端が解明されることを期したい。



### 《参考文献》

- |                   |       |
|-------------------|-------|
| 瀧田 貞一             |       |
| 『常滑陶器誌』常滑町青年会     | 明治45年 |
| 常滑市誌編さん委員会        |       |
| 『常滑窯業誌』常滑市        | 昭和49年 |
| 名古屋市博物館           |       |
| 『企画展・伊勢湾をめぐる船の文化』 | 平成 元年 |
| 井関 弘太郎            |       |
| 『車窓の風景科学』名古屋鉄道（株） | 平成 6年 |

### 【館蔵資料紹介】

月夜図並賛 喜田華堂画 八田知紀賛

絹本墨画 本紙96.5×35.2cm 表具177.5×44.5cm

本作品に和歌の賛を記す八田知紀（1799～1873）は薩摩藩士で、文久3年（1863）近衛家に出仕し、藩の朝廷工作にあたるかたわら香川景樹に師事し、明治維新後東京に出て宮内省の歌道御用掛に任命された歌人である。絵を描く喜田（木田とも）<sup>かどう</sup>華堂（1802～1879）は美濃国不破郡今須（現関ヶ原町）に生まれ、京都に出て岸駒、岸良に学んだのち東国を遊歴、各地の文人墨客と交わり、嘉永（1848～54）の初めに名古屋の廣井水車町に住し、岸派の画家として世に認められた。のちに尾張藩主がその名を聞き、絵師の号を賜った。残された作品は多く、またその作風も多岐にわたっている。

絹本に淡墨で描かれた雲間の月と霞、この単純な構図が知紀の文学とよく融合している。特筆すべきは、表装部分にススキを描き、兎をデザイン化した一文字を採用し、歌・絵・表装、つまり歌人・画家・表具師が一体となって月夜の世界を表現していることである。趣向を凝らした表装具はま見受けられるが、描き表具と呼ばれるこの技法は大変珍しい。この作品は、華堂の画歴から見れば余技的ではあるが、幕末から明治初期にかけての文化人の交流を考える上で貴重である。

〔賛〕 照りし日のおなし雲みを／ゆきめくる影とも／  
見へぬ夏の／よの月 知紀

〔落款〕華堂景静寫意（印）

（毛受英彦）



## 春季特別展

### 「賢治・志功・一英

#### ー児童文学を巡る人々ー」

終わる！！

今年度は宮沢賢治生誕百年に当たり、これを記念して上記の特別展を4月27日(土)から5月26日(日)にかけて開催致しました。

入館者総数は8,023人で、平成4年度春季特別展「棟方志功と佐藤一英」と比較して900人程の減少となりました。期間中アンケートを実施しましたので、4年度と対比的に紹介したいと思います。

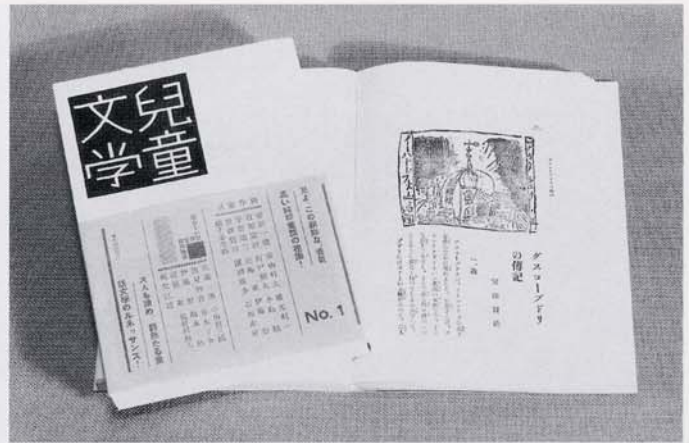
母数は850人で、女性が63%を占めます。前回は62%でしたので、殆ど変わらない比率と言えます。しかしながら、今回は小中学生が41%と前の4.1%の10倍となっており、一概の比較は無理と思われます。このことは本年度は小中学生の団体観覧者にもアンケートを求めたことに因るものです。これを別とすれば、前と同様4、50歳代の女性の来館が一番多いと言えます。

住所では一宮市内が69%と小中学生の影響で7.3ポイントほど上昇しています。県外からは3.8%と動員力は余りありませんでした。宣伝媒体としては、ポスター・市広報・新聞が規程的で、合わせて59ポイントとなります。その他では「知人・友人からの紹介」が多く、この展覧会が評価された結果と言えましよう。有力な媒体と思えるテレビ・ラジオは微々たるものでしかありませんでした。これらの媒体による集客効果は、前と余り変わらないものです。

交通手段としては、自家用車・電車・バス・自転車の順で、平成4年の自家用車・自転車・電車・バスとほぼ同様のものです。

来館回数としては、初めてと5回以上とが双壁で、リピーターとともに企画に応じての来館が顕著な傾向として認められます。

以上が大まかな分析ですが、宮沢賢治生誕百年に際して、賢治について未だ余り知られていない分野に光りが当てられたことが好評価に繋がったものと思われます。以下、賢治・志功・一英3人の関係をもう一度振り返ってみたいと思ひます。



「児童文学」No.2

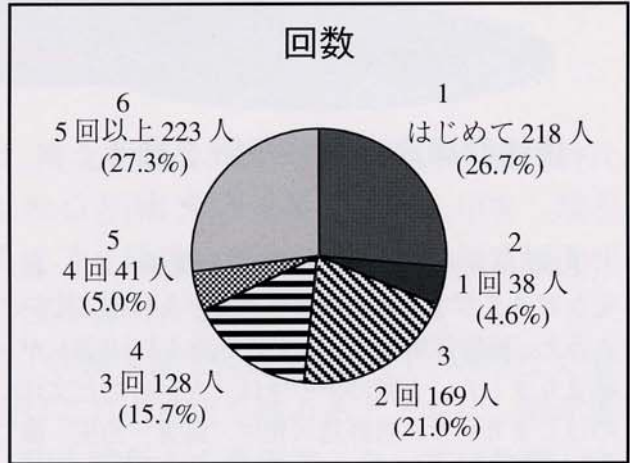
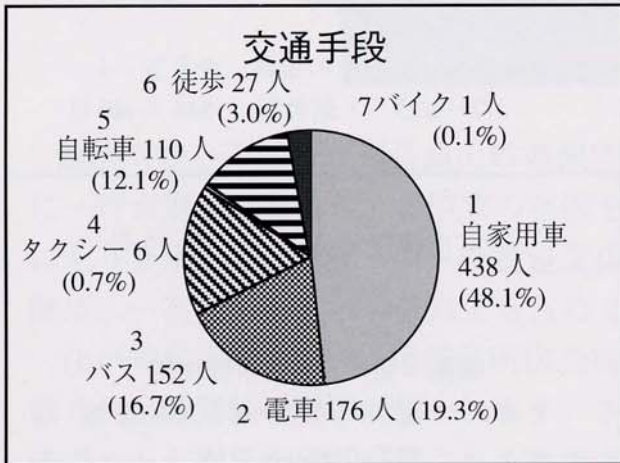
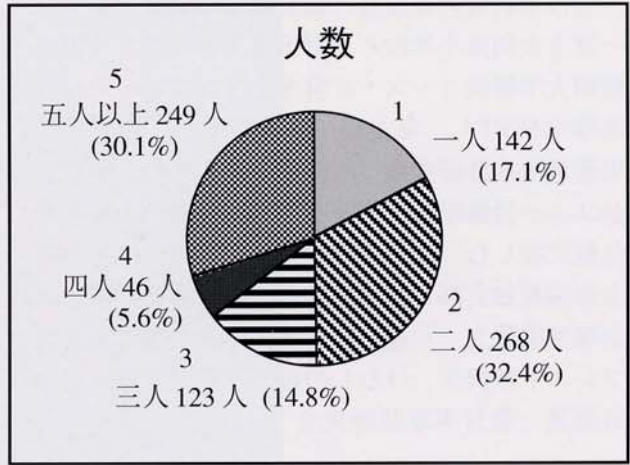
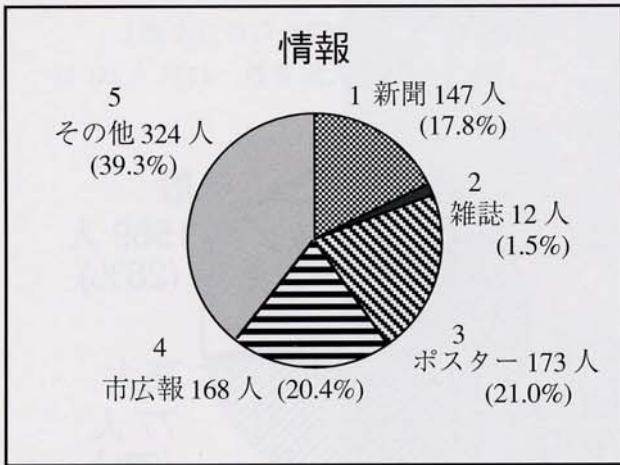
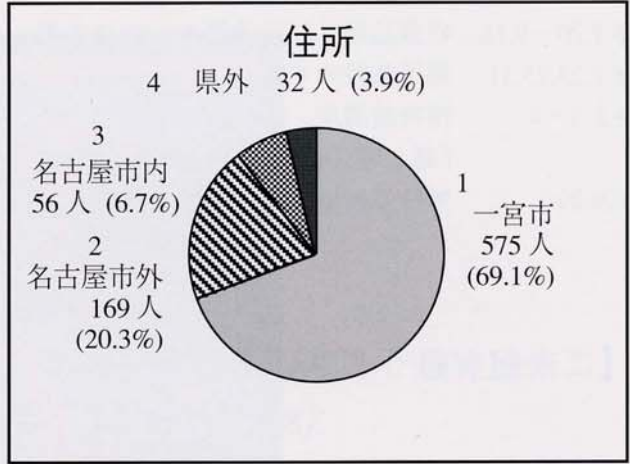
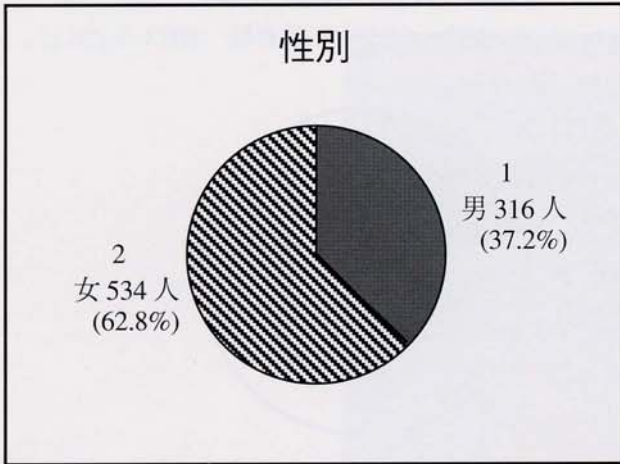
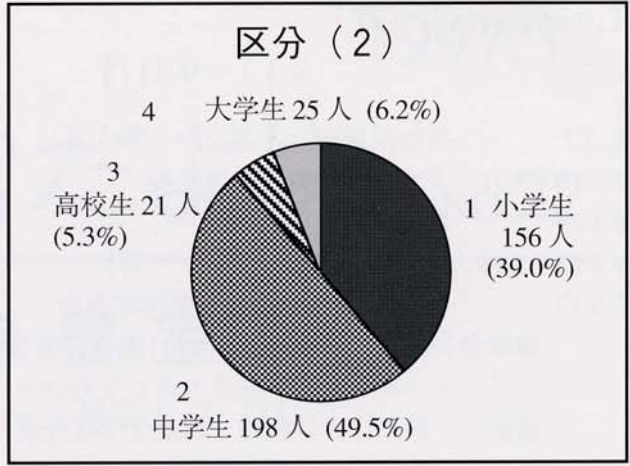
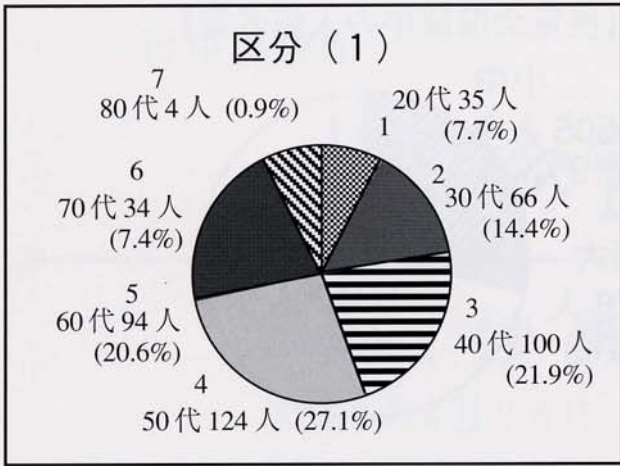
長編詩「大和し美し」等で知られる郷土の象徴派の詩人佐藤一英(明治32年生)は、この詩を完成させた昭和6年から翌年にかけて児童文学の革新を目指した雑誌「児童文学」2冊を編集、東京・文教書院から発行しました。一英は新進気鋭の文学者や画家の発掘に努め、その当時殆ど無名であった宮沢賢治(明治29年生)や棟方志功(明治36年生)等を積極的に登用しました。

賢治と一英は、熱烈な数通の手紙の交信は有ったものの、直接の面識は有りませんでした。昭和4年に知りあった詩人石川善助を通じて賢治を見出し、児童文学への投稿を勧めました。特に「児童文学」NO.2は主として賢治のために編んだと、後に一英は述懐しています。

「児童文学」NO.1、NO.2に、後に賢治の代表作となる長編童話「北守将軍と三人兄弟の医者」・「グスコブドリの伝記」の2作品がそれぞれ掲載されました(未刊のNO.3に寄稿予定であったのが「風の又三郎」)。

志功と一英は、昭和5年頃回合したと見られています。最初の協力作品が、昭和6年「児童文学」NO.1誌での一英の「マフィンちゃんの三つの望み」への挿絵でした。NO.2に賢治の「グスコブドリの伝記」の挿絵も描いています。11年、志功は一英長編詩「大和し美し」(6年詩作)を版画巻に制作、民芸運動の柳宗悦に認められ、世界的大版画家への足掛りを掴んだのは周知の事に属します。

(小野田雅一)



【博物館日誌（抄）

（8.3.1～9.31）】

- 8.3.2 博物館講座「土器をつくろう」
- 8.3.10～3.31 手つむぎ・染め・織り展
- 8.3.24 島文楽公演
- 8.4.27～5.26 特別展「賢治・志功・一英」
- 8.5.12 一宮シティ室内管弦楽団演奏会  
講演会「グスコブドリの伝記」誕生の背景  
～一英・賢治・志功のめぐりあい～  
講師 前大谷大学教授・児童文学研究家  
西田良子 氏
- 8.7.20～9.16 収藏品展 江戸後期からの日本画
- 8.7.23,25,31 親子施設めぐり
- 8.8.3～4 博物館講座  
「縄文時代と弥生時代の布に挑戦」
- 8.9.29 博物館講座「尾張平野を語る」

【ご来館有難うございました

（8.3.1～9.31）】

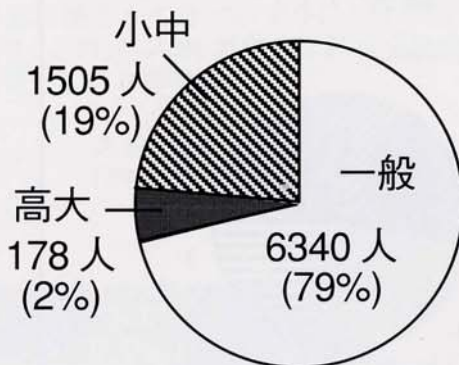
一宮市選挙管理委員会 稲沢市北町地区南婦人会  
一宮市大和南小学校 一宮市富士小学校 大垣女子  
短期大学環境コース 一宮女子短期大学 一宮興道  
高等学校PTA 草文会 萩原中学校 萩原小学校  
尾張地区国語研究会 江南市北部中学校 明翠会  
全ユニ労働組合一宮分室 東浅井町内会婦人部  
仏教に親しむ 牡丹の吟行会 萩原中央珠算学園  
未来図愛知支部 博物館協会職員研修会 岩倉市社  
会福祉協議会 日進市書道連盟 選挙管理委員会  
フレスト妙興寺 けむしの会 一宮中島地区社会教  
育委員 全日本軍装研究会

博物館ニュース

博物館講座『尾張平野を語る』が  
始まりました！！

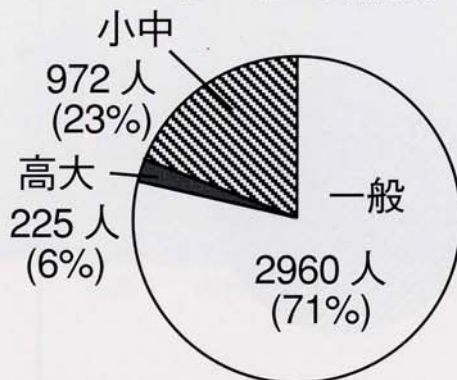
平成8年度から、尾張平野の自然環境・文化・歴史などさまざまな研究成果をみなさんに伝えていこうと、博物館講座『尾張平野を語る』（9月）が始まりました。今回のテーマは「人と自然と文化のはじまり」で、岩野見司先生・森勇一先生・海津正倫先生にご講演いただきました。ただいま講演録を作成中です。お楽しみに！！

【展覧会開催中の入館者数】



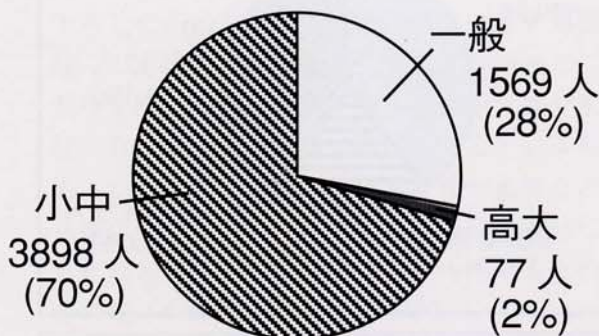
特別展「賢治・志功・一英」

4/27～5/26 入館者数 8023人/26日



収藏品展「江戸後期からの日本画」

7/20～9/16 入館者数 4157人/51日



収藏品展「くらしの道具—今と昔—」

1/7～2/23 入館者数 5544人/40日

一宮市博物館だより 第22号

平成9年3月25日

編集・発行 一宮市博物館

〒491 一宮市大和町妙興寺2390番地

TEL 0586-46-3215

FAX 0586-46-3216